様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３８９１

研究課題名（和文）近現代日本における予防接種の展開とそれをめぐる議論の歴史社会学的分析

研究課題名（英文）An investigation of controversies over smallpox immunization in twentieth-century Japan

研究代表者
香西　豊子（Kozai, Toyoko）

佛教大学・社会学部・准教授

研究者番号：３０５０７８１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、歴史上もっとも早く実用化された種痘（天然痘にたいする予防接種）を事例に、それが法制度化され実施される過程で、いかなる議論があったのかを検証しすることで、予防というかたちをとった身体への医療の介入が帯びる政治性を実体的に明らかにしようと試みた。
　分析の結果、種痘をめぐる議論の焦点は、当初の人口の維持・回復を企図した「必要性」から、明治期半ば以降には「有効性」・「強制性」へと遷移し、1960年代後半以降はそこへ「副反応」とその救済とが加わったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to clarify the relationship between preventive medicine and politics through the case of controversies over smallpox immunization mainly in twentieth-century Japan. In Japan, compulsory vaccination toward a whole nation started in the second half of the ninetieth century and since then it continued just before the eradication of smallpox.
As a result of investigations into the political and medical controversies in the meantime, it was ascertained that the main point of the controversies consisted first in the necessity of vaccination and then in the effectiveness and the coercion of vaccination, and that the risk of showing unfavorable symptoms after vaccination has not been noticed for long.

研究分野：医療社会学　医学史

キーワード：予防接種　種痘　天然痘　歴史　議論　副反応

１．研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

予防接種は、18 世紀末に天然痘（痘瘡・疱瘡とも）に対する予防法として実用化されて以来、感染症に対するもっとも有効な医療的措置として一般化している。それだけに、この予防接種をめぐっては、現在も各国において、純粋に医薬系から人文・社会科学系に至るまで、幅広い学問領域で研究が進められている。日本国内の人文・社会科学系領域に絞ってみても、それぞれの感染症に関する膨大な数の医学史・公衆衛生史の記述のほか、戦後の予防接種政策のゆらぎに対する行政学的分析や予防接種の副反応をめぐる裁判の記録の収集・整理といったアクチュアルな研究も蓄積されつつあった。

しかしながら、国内の予防接種に関する人文・社会科学系の研究は、動向として、歴史的事象の表層的な記述や現状の追認が多く、その歴史的事象が社会にもたらした意味合いを捉え返す研究はほとんどなされていなかった。予防接種はまた、社会学の理論的な研究において、「リスク」が近代に至って社会に胚胎する事態を説明する際の事例とされることもあったが、そこでの言及のされ方は理論の先行した一面的なもので、「副反応」以外にも展開された（されうる）予防接種をめぐる問題系をかえって見取りにくくしていた。

そこで本研究は、種痘（天然痘にたいする予防接種で、歴史上もっとも早く実用化された）を事例に、近代以降の日本における予防接種の実施状態とそれをめぐって闘わされた議論とを資料にもとづいて検証し、予防接種がいかなる要件のもとで実施されていたかを析出することで、既存の研究蓄積を補完することを目指すこととした。

(2) 研究業績の状況

研究代表者は、本研究をはじめるに先だち、近世日本における天然痘の流行の様態やそれへの習俗的・医学的対処法、予防接種導入期に噴出した実施の是非をめぐる議論などを整理し、5 編の論文にまとめていた。また直近の 2 年間は、科学研究費採択課題（平成 25 年度研究活動スタート支援「日本における予防接種の歴史社会学的研究」）に取り組み、予防接種がどのような時代的な要請のなかで実施されていたかにつき、予備的な考察を終えていた。

これらの研究により、社会秩序の安定をはかる全体主義的な予防接種制度の歴史が、日本においては、幕末の「辺境」における強制的な種痘を起源としていることが明らかとなった。

そこで次なる課題として、幕末期のそうした予防接種をめぐる動向が、近代以降どのように引き継がれ（あるいは変容し）たのか究明しようと思い至った。

２．研究の目的

本研究は、近代以降に日本で本格的に施行されはじめた予防接種の展開を、歴史社会学の手法をもちいて検証することをとおし、予防というかたちをとった身体への医療の介入がいかなる政治性を帯びうるかを実体的に明らかにすることを目指した。国家や社会の存立を脅かす感染症の爆発的発生のリスクが、予防接種を通して個々の身体のリスクへと振り替えられる様相を分析し、現代の日本の予防的医療がはらむリスクの政治性をあぶり出すためである。

この目的を達成すべく、研究課題はさらに厳密に、以下 3 点のサブ課題（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）へと分節した。

(1) 近代の日本における予防接種の是非をめぐる議論の全容解明

幕末から明治期にかけて、急性でかつ致死率の非常に高い感染症のグローバル化の影響は、日本列島でも本格的に見られはじめ、それへの対抗策としての予防接種は、為政者により積極的に導入されるようになる。しかし、予防接種によって逆に感染症に罹患・死亡する事例が頻発したり、予防接種を法制度で強制しても感染症の自然流行を抑制しきれなかったりしたことにより、予防接種は長くその倫理性や医療上の意義を問われた。

本研究ではまずサブ課題Ⅰとして、この幕末から近代にかけての時期にみられた予防接種の是非をめぐる議論を整理し、予防接種の施行が当時おびていた政治性を資料に則して明らかにすることとした。

(2) 明治期から戦前期までの天然痘ワクチンの製造・流通の実態の解明

明治の初期まで、ヒトからヒトへと体液を植え継ぐことで実施されていた予防接種は、明治中期に工業的なワクチン製造が軌道に乗るとともに新たな局面を迎える。品質の一定したワクチンの安定的な供給が可能になったことにより、予防接種に関する法制度が整備され、予防接種のはらむリスクもまた構造化されるのである。

そこで本研究は、サブ課題Ⅱとして、先駆的な研究では言及されるにとどまっていた明治期以降の天然痘ワクチン製造所約 60 ヶ所の実態を資料から復元し、ワクチンの製造・流通の実態と予防接種の法制度の構築との関係性を検証することを掲げた。

(3) 戦後の「種痘禍」のリスク論的分析と、それが現代の予防接種制度に及ぼした影響の析出

戦後になると天然痘の流行はほぼ抑制され、むしろ予防接種への副反応により損傷される身体の数が、天然痘への感染そのものによって損傷される身体の数を上回るようになる。この転倒現象は、1960 年代末以降に「種痘禍」として糾弾されはじめ、天然痘をはじ

めとする感染症の予防接種に対する強制は、部分的に解除されてゆく。しかし、予防接種という医療は、現在もなおリスクをともないつつ存続している。

本研究はサブ課題Ⅲとして、そうした予防接種の現状を歴史社会学的観点から定位し、近年あらたに派生している問題（たとえば、子宮頸がんワクチンの接種がはらむ、リスク配分のジェンダー間での非対称性）の淵源を析出することを試みた。

３．研究の方法

本研究の研究手法は、近現代日本の予防接種にかんする資料を、可能なかぎり広く調査・収集のうえ、時間軸に沿って整理・読解し、それらが成立した条件を分析するというものである。そのため、いずれのサブ課題においても、最初の段階で、資料の調査・収集、整理・読解を行い、分析する対象の蓄積・拡充をはかった。

（1）資料の調査・収集

サブ課題Ⅰ・Ⅱについては、資料の体系的な整理がほとんどなされていないところからのスタートであったため、統計資料（『人口動態統計』・『衛生局年報』・『衛生年報』・『保健所運営報告年報』など）や公文書（「種痘館規則」・「種痘規則」・「種痘医規則」・「天然痘予防規則」・「種痘法」・「予防接種法」等の制定にかんする記録文書など）、医学系雑誌（『細菌学雑誌』・『日本衛生学雑誌』・『臨床医学』・『大日本私立衛生会雑誌』・『東京医事新誌』・『日本医事新報』など）から、関連する情報を収集するところからはじめた。

なお、サブ課題Ⅰでは、調査をすすめるなかで、近世後期の種痘の是非をめぐる議論を再調査する必要が生じたため、京都大学富士川文庫や杏雨書屋（武田科学振興財団）などに所蔵されている古医書から、必要箇所を適宜複写・収集した。また、これまで研究の射程から抜け落ちていた琉球王国での種痘について、資料を収集するため、現地調査をおこなった。

サブ課題Ⅲについては、「種痘禍」を報じた『読売新聞』・『朝日新聞』・『毎日新聞』の記事や、「種痘禍」をうけてだされた当局の通達、同時代に発表された個人や団体による「種痘禍」にたいする見解・論考などを、網羅的に収集した。

（2）資料の整理・読解・データ入力

いずれのサブ課題においても、調査・収集した資料は、ファイリング・配架する時点で再度通読し、内容ごとに分類しなおした。古医書の複写物は、通読のうえ翻刻し、のちの分析に備えた。

統計資料については、必要な項目を選別してデータを表計算ソフトに入力し、適宜、表やグラフに加工した（「痘瘡の罹患者数・死者数の推移」・「初種痘該当人口」・「初種痘実施率」・「予防接種後の合併症（「種痘後汎発性牛痘疹」・「種痘後脳炎」等）による死亡者数の推移」など）。

（3）資料の分析

サブ課題Ⅰについては、明治期から戦前期にかけての天然痘の流行状況が、種痘の是非をめぐる議論や種痘の法制化、種痘（初種）の実施率の変化などと、どのように相関しているかを検証した。なお、この課題を遂行するなかで、明治期以降の種痘の是非をめぐる議論が、それ以前の議論に大きく規定されていることが改めて判明したため、近世中期よりつづく「天命」に関する議論、近世後期の種痘の治療方針をめぐる議論、ならびに近世後期以降の種痘の実施状態を再調査し、近世期から明治期にかけて、議論の焦点がどのように移行したかを探った。

サブ課題Ⅱについては、まず、先行研究で触れられることのなかった各製造所のワクチン販売価格や販売経路、ワクチンの品質管理に関する制度の変遷などを、資料から再現しようと試みた。しかしながら、資料を読み込む過程で、データが欠落している箇所がいくつか見つかり、当初の計画通り、明治から戦前期の天然痘ワクチンの製造・流通の様態が、天然痘の流行状況や種痘の是非をめぐる議論の変容とどの程度の相関性を有するか、析出するまでには至らなかった。

サブ課題Ⅲについては、まず、戦後から1970 年代にかけて、予防接種をめぐり何が誰によってどの時機に「問題」とされたかを跡づけた。そのうえで、見えてきた議論の複数の焦点（予防接種の「有用性」・「有効性」・「必要性」・「副反応」など）を、議論のもちあがった領域ごとに時系列に沿って整理し、議論の焦点が移り変わる要因を探った。

また、予防接種をめぐる議論の複数の焦点のうち、どの焦点がどの程度、種痘（初種＝第一期）の実施率や予防接種制度の改変と相関していたか、また各領域での議論は相互にどのように連関していたか（いなかったか）を精査した。

４．研究成果

本研究の各サブ課題の成果は、課題の遂行に並行して、随時論文に取りまとめた。また、本研究全体の成果は、書籍として 2019 年に公刊予定である。なお、3 つのサブ課題のうち、サブ課題Ⅱでは一部課題がのこったが、これについては、今後も調査を継続し、成果報告の書籍の内容に反映させる。

各サブ課題の成果は、以下の通りである。

（1）明治期から戦前期ならびに戦後期における予防接種をめぐる議論の再構成

サブ課題Ⅰにかんして、明治初年以降の天然痘の「罹患率・死亡率」や種痘の「実施率」等、各時代の種痘の実施の様態を復元するとともに、明治期以降の予防接種をめぐる議論

は、すでに実施の是非ではなく、いかに実施率を上げるか（予防接種の「強制性」）へと、焦点を移していたことを確認した。

（2）近世後期における予防接種の是非をめぐる議論の再構成
サブ課題Ⅰから派生した課題として、予防接種の是非が一大論点となっていた近世後期の議論を再調査した結果、議論の背景には、①漢・蘭の医学思想上の対立のみならず、②「人別」（人口）の維持・回復をはかる為政者の意図や、③18 世紀半ば以降連綿とつづいていた医師の職業倫理をめぐる論争など、いくつかの問題系が開けていたことを確認した。

（3）予防接種をめぐる議論において「副反応」が焦点化されるにいたる経緯の解明
サブ課題Ⅲにかんして、現在、予防接種をめぐる議論の三大論点とされる「有効性」・「必要性」・「副反応」のうち、「副反応」は 1960 年代以降に論点として浮上したことを資料にもとづき明らかにした。
後世にいう予防接種の「副反応」は、明治期以降、医学雑誌のなかで、「異常経過」の症例として報告されてはいたが、種痘との（因果関係ではなく）時間的な前後関係を指摘されるにとどまっていた。20 世紀初頭に「種痘法」の制定が議論された際には、法律化によって種痘の強制性が増すことにたいし、慎重な意見もみられた。しかし、1910 年に同法は制定され、戦後 1948 年制定の「予防接種法」でも、「異常経過」の症例は不問に付されたまま、接種義務が法制化されたのだった。
この「副反応」が予防接種をめぐる議論のなかで 1960 年代以降に焦点化される経緯は、論文にまとめたが、調査の過程で、明らかにすべき課題がいくつか見つかった。それらについては、独立した研究課題として切り出し、新たな研究計画のもとで継続的に解明を目指すこととした（平成 30 年度科学研究費助成事業：基盤研究（C）・日本における予防接種の「副反応」をめぐる議論と法制度の歴史社会学的研究）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）
①香西豊子、甲斐の疫学者――橋本伯寿『断毒論』再読、啓迪、査読有、31 号、2017 年、1-10 頁
② Toyoko Kozai, The Medical Arena: Discourses in Japanese medicine during the early-modern period, examined through manuals on the treatment of smallpox, Hattori, O. ed. *The Social History of "Manuals" for the Body and Environment: Tools for Education or a Means of Social Control?* Zürich: LIT VERLAG. pp.31-65
③香西豊子、球陽の清瘡、啓迪、査読有、32 号、2018 年、1-11 頁

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　2　件）
①香西豊子、ミネルヴァ書房、歴史と向きあう社会学――資料・表象・経験、2015 年、83-101 頁（京水の幻影、鷗外の追憶――「湮滅」を記述する歴史社会学の可能性）
②香西豊子、ミネルヴァ書房、現代社会における病をめぐるコンテステーション、2018 年（刊行予定）、頁未定（予防接種――一九七〇年代の「種痘禍」論争から）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
香西豊子（Kozai Toyoko）
佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号：30507819

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし